〔書評〕

藤井佐美著『真言系唱導説話の研究 ―付・翻刻 仁和寺所蔵『真言宗打聞集』』

近本謙介

本書は、談義の説話として『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』を分析する第一編と、説草の説話として『説経才学抄』を分析する第二編をもって構成され、併せて第一編の研究対象である『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』の伝本、仁和寺所蔵古写本『真言宗打聞集』の翻刻を掲載して、真言系唱導説話の研究とするものである。

研究の進んでいない覚鑁の談義の説話を丹念に整理して分析を試み、また一方で本文が紹介されて研究の気運の高まる『説経才学抄』について、精力的に唱導の書としての性格を明らかにしようとした研究姿勢とその誠実なアプローチに、まずは敬意を表したい。

本書「序論」において、先学の研究に触れつつ、著者は自らの立ち位置を明確にしている。唱導という「場」における説話が、法理（教義）とどのように共存しつつ、効果的な役割を果たしてゆくかに注目する著者は、「唱導の実態」、「文学の発生」、唱導における「説話の力」に迫ることへのこだわりを、本論中においても繰り返し表明している。

本論における各章の要約は、終章として配された「結語」部分に丁寧にまとめられているので、ここではそれらについて記述することは避けて、問題意識を喚起されたいくつかの議論について評していく形式を採りたい。

「第一編　談義の説話」は、以下のような構成となっている。

第一章　『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』研究史
第二章　『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』相伝をめぐる筆録の方法
第三章　『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』二教論談義考
第四章　『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』菩提心論談義考
第五章　『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』伝法堂談義の説話とその背景

第三章での『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』所収説話と『打聞

集』および『今昔物語集』との関係に関する分析は注目される。『今昔物語集』所収の金人による告げと金色不動説話について、「この説話の意図するところは何れも入唐僧の仏法受容史の理解にあり」と指摘している点は重要であり、『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』所収説話について、「本談義の二つ乃至三つの説話が天台僧の顕密を広める経緯を明らかにしたものであることは確かである」とする分析も正鵠を得ていよう。『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』と『今昔物語集』といった院政期の唱導談義と説話集の説話とにこのような構造の類似性を見いだせることは、著者の検証しようとするところにもかなった事例となるであろう。

智証大師円珍が清涼山寺の火災を灑水により消し止めた説話を踏まえて、その際に結んだ印についての関心が『雑談鈔』（四）「智証大師青龍寺ノ炎上ヲ消ス事」に、「私云。大師灑水之時結印ハ何印哉。秘蔵事也。有二口伝一可レ聞レ之。」として見えていることの指摘も、行き届いたものである。この説話の「後半部に相当する箇所が口伝を伴った秘事に関わる説話として記されている」との位置づけは、『雑談鈔』の成立を覚鑁の時代よりも下る鎌倉期と考えた場合、覚鑁周辺で語られた説話が前提あるいは基盤となって、灑水という行為と不可分な結印の要素が、寺門派において秘事口伝化していく経緯が窺われるわけで、説話の流伝や宗派を超越した生態を考える上できわめて興味深い。またこれが、指摘のあるように「仏法受容史」と関わる一連の説話である点にはさらに注意が払われてもよいであろう。『雑談鈔』の著された時代には、おそらく智証大師円珍の入唐と仏法受容の歴史とを、新たな文脈において問い直そうとする人々と運動とが充満していたはずだからである。そのような射程の中に本話の享受史を見据えたときに、さらに大きな意味合いが見えてくるものと思われる。覚鑁における談義と説話の問題を捉えるという本書の目的からは逸脱するかもしれないが、他ならぬ不動化現説話が覚鑁その人を考える上においても象徴的な説話であるだけに、この説話の包含する意味合いは小さくないのである。第二章において指摘される、三井寺の身代わり不動説話が法生房によって語られたものであることを仁和寺本が記しとどめる点も重要であるが、覚鑁の伝記研究と併せて議論を深めるべきではないか。

著者は、覚鑁における不動化現説話が、苫米地誠一氏の論考に詳しく整理されている点に目配りしているが、さらに意義を探ってほしいという期待が高まる章であった。言い方を換えれば、そのような説話を記し残す『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』所収話を改めて威儀を正して読み深めるべきであるとの思いを強くさせられた。ここに至って初めて、著者の問題意識に評者としても追いついたわけである。

次に、第四章の、『高野山大伝法院本願霊瑞竝寺家縁起』十一所収「稲荷明神託宣事」に記される伝法会再興のための大伝法院建立に関する説話と、『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』に記される三つの説話との関係を指摘する部分も示唆に富む。これらが稲荷や丹生明神といった神祇との関わりにおいて語られる点はさらに

考究していく必要があろう。またこの問題が、毘沙門天像に関する議論を経て、『二教論談義』に示される画像と仏像とを同体とする言説に結びつけられて論じられる点も重要である。「即チ此ノ画像ヲ本有微細ノ仏ト同体ト観ジ、慥ニ真仏ソト思念スベシ。如ク此ノ観念スレバ、即チ画像成ルニ真仏ト同体ト」との概念は、画像の生身性といった問題とも関わっており、覚鑁における談義を基点として、信仰の文化史の方面へも分析の翼を広げてほしい思いを禁じ得なかった。

仁和寺所蔵『真言宗打聞集』（『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』）の従来の紹介の問題点を踏まえた周到な翻刻紹介は、錯簡の指摘や本文の掲出方法にも工夫が凝らされており、今後の本文研究に資するところ多大である。

「第二編　説草の説話」は、以下のような構成となっている。

第一章　『説経才学抄』の標題説話
第二章　『説経才学抄』の経釈とヨミ
第三章　『説経才学抄』をめぐる往生伝の系譜
第四章　『説経才学抄』の修行説話
第五章　『説経才学抄』と説話文学

『説経才学抄』という書物の分析は一筋縄ではいかないものであるが、真福寺善本叢刊三『説経才学抄』（一九九九年　臨川書店）所収の山崎誠氏解題に、「『説経才学抄』について、「断片的な記事さえもが、澄憲の気配を濃厚に漂わせている」、「従来、因縁を語る説草から説話集への道筋が辿られるが、本書発見により、説話集から説草因縁へと逆方向の、謂わば解体が行なわれたことが明らかとなった」との指摘がある。本書においても『澄憲作文集』を初めとする澄憲の唱導との重なりが議論され、『注好選』その他の説話集が俎上に載せられているが、これらには、『説経才学抄』成立時とおぼしき鎌倉時代末期の状況が考慮されるべきであろうと考える。澄憲の時期とこの時期とでは、唱導を取り巻く環境も、説話集受容の在り方も異なってきていると考えられ、『説経才学抄』を単純に真言系説話の範疇に定位する危惧もぬぐい切れないように思われるのである。

『説経才学抄』の『注好選』引用が、「原姿に近いとされる金剛寺本の書写形態を保ちつつ東寺観智院本と同質内容を含む別本」に拠ることを明らかにした点などは、鎌倉期における『注好選』本文研究にも資するものであるが、こうした『説経才学抄』引用説話研究は、鎌倉時代末期における説話集の動向を考える上にも、多くの示唆を与えるものと思う。

本編については、いくつかの注文もないわけではない。たとえば各章において、「部立て」・「内容（出典名と末尾）」・「備考」として示される『説経才学抄』の構造は、参考にはなるが、著者の覚書としてもっとも利用価値のある提示の仕方であると思われ、むしろ後続の「留意点」において、さらに丁寧な論述を用意してほしかった。「結語」において、「各々の考察は、総じて注釈を兼ねる内部徴証に終始してしまった感がある」と、著者自らが今後の課題とする点に言及するのは憚られるが、更なる分析がほしい

部分もあったことは確かである。本書に一貫した注釈的態度は、奇を衒わない正統的なアプローチであり好ましいものであるが、分析の核心に手が届きそうになりながら、連続ドラマの翌週が待ち遠しいような思いをさせられる場面がなかったとはいえない。

全体的には、真言系唱導説話として覚鑁に着目した上で、そこに番わされるのが『説経才学抄』であって、院政期の唱導として考慮されるべき白河、鳥羽院政期の表白等に十分な目配りがなされていない点が課題として残るように思われる。「結語」には、覚鑁の唱導と澄憲の唱導の比較に関する言及があるが、両者の唱導を比較検討するためには、院政期の南都や寺門派におけるそれに関する検証が不可欠であろう。研究史が厚く積み重ねられているわけではない領域に楔を打ち込んだ功績に対して時期尚早な注文と知りつつ、一言付け加えさせていただく。

本書と相前後して刊行された書物として、苫米地誠一氏『平安期真言密教の研究』（二〇〇八年　ノンブル社）および堀内規之氏『済暹教学の研究―院政期真言密教の諸問題―』（二〇〇九年　ノンブル社）がある。前者は、覚鑁研究の教学面からの先端研究として、後者は本書と関わる済暹研究の現在における到達点を示すものとして活用されるべきものであり、ともに院政期の唱導を考える上での有益な視点を多く内包している。

いたずらに不確かな推論に踏み込むことなく、先行研究への丁寧な言及を踏まえつつ、謙虚で堅実な位置づけに帰結していく本書の姿勢は、他者の発表に静かに耳を傾ける学会の場での著者のゆかしい姿にも通じるが、時としてそこから逸脱した、濃厚な検証の軌跡と論述とが表に現れてもよかったのではないか。

本書末尾には、人名等の索引とともに、『覚鑁聖人伝法会談義打聞集』の「談義キーワード」索引が付されており、談義の構造を見渡すのに利便である。

（三弥井書店　二〇〇八年一一月　三六七頁　本体価格八、〇〇〇円）

（ちかもと・けんすけ　筑波大学大学院准教授）